

かゑらじと かねて思へハ 梓弓
なき数に入る 名をぞとどむる
四條畷に散った若き武将、楠正行

楠正行通信 第104号

令和2年1月14日

発行＝四條畷楠正行の会

〒575-0021 四條畷市南野5丁目2番16号

四條畷市立教育文化センター内 072-878-0020

正行、河内東条平和の時代の内憂

和睦派、近衛経忠が仕掛けた藤氏一揆

＝ 東北武士を巻き込んだ吉野朝の内紛 ＝

● 藤原北家末裔の近衛経忠 ●

11月の例会では、藤氏一揆をおこした近衛経忠を取り上げた。

近衛経忠の藤氏一揆は、興国2年1341年の春ごろから興国4年1343年末に至るほぼ3年間の動きで、正行16歳から18歳、吉野朝の官途に就き、後村上天皇を支えて、自らの力を蓄えていく、大変重要な時期と重なっている。

吉野朝を2分する北畠親房と近衛経忠。この二人の重鎮のはざまにあって、正行は大いに悩まされたものと思われる。

では、この近衛経忠という人物はどのような人物であったのか。

1302年に生まれ、1352年、51歳で死去している。

藤原鎌足の子、不比等の二男、藤原房前を祖とする藤原北家の家系、近衛流の末裔で、建武の新政時には、藤氏長者に復し、要職を占めるが、1337年には吉野朝廷に出奔し、関白を辞任し、吉野朝廷では左大臣に就く。

延元4年1339年、義良親王は踐祚して後村上天皇となるが、この時親王は近衛経忠の屋敷で讓位を受けたと云われており、吉野における彼の地位が想像できる。

近衛経忠は、武家方＝北朝への和平工作を以って南北両朝の和睦を計画し、なんとか、政治工作によって吉野朝の苦境を救おうとしたもの。

経忠の考えは、北畠親房の主戦論、理想論に対し、和睦

派、講和派といえる立場で、このような吉野朝内部に意見の対立があり、和睦派の近衛経忠が北朝に対する和平工作を行ったその現れが藤氏一揆であったといえる。

● 興国2年ごろの奥州 ●

興国2年1341年頃の奥州といえば、この地に入った北畠親房は、常陸の小田城にあって、高師冬の包囲を受け苦戦状態にあった。

一方、藤氏一揆を仕掛けた近衛経忠は、下野の小山氏、常陸の小田・結城両氏らに藤氏同盟を呼び掛け、自らの政権＝第三王朝を樹立し、小山朝郷を坂東管領にする計画であった。

平将門の乱(939)鎮圧に功のあった藤原秀郷の子孫に、小山・結城・長沼・佐野などの諸氏があり、中でも小山氏は下野の国最大の豪族的領主であった。

前門に師冬軍の攻勢・外患、後門に藤氏同盟の反旗・内憂を抱えた親房は、小山氏の取り込み・吉野朝

帰順は困難と判断しながら、近衛経忠の呼びかけは風聞に過ぎないので協力するな、と結城親朝に書状を送り強調する。

近衛経忠の藤氏同盟の働きかけは、明らかに吉野朝に対する分派行動であり、村上源氏の流れをくむ親房への反旗でもあった。

一方、東国経営の行き詰まり打開に向けて吉野朝廷は、興良親王を東国に送り、親房のいる小田城と目と鼻の先に



位置する大宝城に行在所を定めた。興良親王が奥州に入ったことで、経忠の藤氏同盟と重なり、第三王朝樹立の動きか、との憶測も飛ぶことに。

● 興国4年ごろの奥州 ●

しかし、結城親朝を筆頭に東国武士の吉野朝方合力を取り込もうとした親房の計画はほとんど成功せず、完全に失敗に帰した。

この大きな原因は、公家優越武家蔑視の妥協を図らない東国武士に対する姿勢にあったと云える。東国武士の恩賞要求を悉く廃したのである。

親房は孤立し、東国経営に行き詰まり、小田城からさらに山深い関城に移っていた。吉野朝、官軍の苦悩は日増しに深まり、「寒気(寒さと餓え)喉に迫り候」という事態にまで追い込まれていく。

一方、この年の春ごろ、小山朝郷は大宝城の興良親王を誘い出し、小山城に向かい入れ、自己の政権構想＝第三王朝＝藤氏同盟の建設に踏み出していた。

● 幻の藤氏同盟の結末 ●

興国4年1343年6月、結城親朝が北朝に降り、11月に入り、高師冬の攻勢が一段と強まると、春日顕国、興良親王の護る大宝城が陥落し、興良親王は西に走った。

引き続き、大宝沼を挟んで立地する関城も陥落し、親房も西に走った。

近衛経忠は、頼りとした小山氏の敗北を受け、左大臣を辞し、失脚する。

この後の小山朝郷や興良親王の動向は全く分からず、朝郷も3年後に亡くなり、藤氏同盟＝第三王朝の夢ははかなくも歴史から消え去ってしまった。

一方、命かながら吉野に戻った北畠親房は、翌年の興国5年1344年3月、吉野朝廷から准后に準ずる地位を与えられ、大和・宇多の土地を賜っている。そして、この年4月に、最初の全国開戦令を発し、阿蘇の宇治惟時には「立つべし」との綸旨を送るなど、主戦論の先鋒としてこの後の官軍の指揮を執ることとなる。

まとめ

● 正行の内憂・外患 ●

正行は、延元元年1336年湊川の戦いで父、正成が討死した後を受けて楠氏の頭領となった。

その後数年にわたって、武家方との戦い、河内天野の一大合戦を中心とする南部戦線、河内の国で繰り広げられた北部戦線と、第1期戦乱時代を過ごす。この頃、正行は千早東条に在って前線には赴いていない。

そして、戦いが終息し、正行にとって河内・東条平和の時代を迎える。

興国元年1340年、15歳になった正行は左衛門尉・檢非違使に任じられ、官途に就き、その忠実な精勤ぶりを示すように、その後ほぼ毎年国宣を残している。

父の遺訓を護り、吉野朝復権に向けて自らの力を蓄え、頭領としての地歩を築いていく。この時、藤氏一揆を仕掛

けたのが近衛経忠であった。奥州で吉野朝への合力を求め活動する北畠親房の主戦論に対して、京都＝武家方との和睦によって吉野朝廷の復権を果たそうと、藤原氏一族に合力を求め分派行動をとったのである。

正行は、この分派行動に大いに困惑させられたものと推測できる。

中世に在って、超え難い身分の壁を感じながら、黙々と官途を務めながら、力をつけることに集中したい正行を、相当動揺させる動きであったと思われる。

しかし、近衛経忠の動きも、奥州で合力する藤原一族もまとまらず、高師冬の攻勢が一段と強まり、結城親朝を筆頭に武家方になびく武将が相次ぎ、興国4年1343年末には藤原一揆も夢と終る。

正行を悩ました近衛経忠は失脚するが、奥州から吉野に戻った北畠親房は公家トップに君臨し、主戦論の急先鋒として全国開戦令を発し、武家方への攻勢を仕掛けるのである。そして、官方武将の中心に育っていた正行を、その先頭に立たせ、戦いによる武家方打倒を仕掛けていくことに。

正行の河内東条平和の時代も長続きせず、北畠親房の主戦論は、正平1年12月、征西将軍官・懐良親王に充てられた「東北以外の地で蜂起」との通告を端として、中国・四国の水軍を動かさず、遂に正行、第2期戦乱の時代へと突入していく。

藤原一揆は、今まであまりスポットをあてられることはなかったが、史料の少ない正行の事跡を探っていく上で、避けて通れない大事な事跡と云える。

16歳から18歳、ようやく第1期戦乱も収まり、官途について吉野朝廷を支えながら、自らの力を蓄えていこうというまさにそのような時期に、主戦派と和睦派の対立に悩まされた正行。河内東条が平和の時代にあつて、正行を悩ます大きな出来事、その仕掛人が近衛経忠であった。

◆寺田いづみ氏の指摘

「風立ち 一楠木正行伝」(言海書房)の作者、寺田いづみ氏は、この藤原一揆に関して、次のようなメッセージを発している。

正行への降嫁話、裏で勢力争いが・・・

もし、正行の母が藤原藤房の妹、滋子説に立てば、和睦派の公家は、その事を理由に正行を取り込めたのではないかと、思う。

吉野拾遺に載る、日野俊基の遺児、弁内侍を正行の妻にとの話があるが、この日野氏は、藤原氏に失脚を企てられた北畠親房の嫡男・顕家の妻の実家であることを思うとき、そこに政治的なおいを感じてしまう。

もし仮に、正行がこの降嫁話を受けていたとしたら、正行は藤原氏から離れ、北畠親房よりのスタンスをとるという意思表示になったのだろうか、と思ひめぐらす。いずれにしても、南朝那遣一の武家への降嫁話、何らかの裏での勢力争いがあったとしても何の不思議もない。

(文責『四條畷楠正行の会』代表 扇谷昭)